



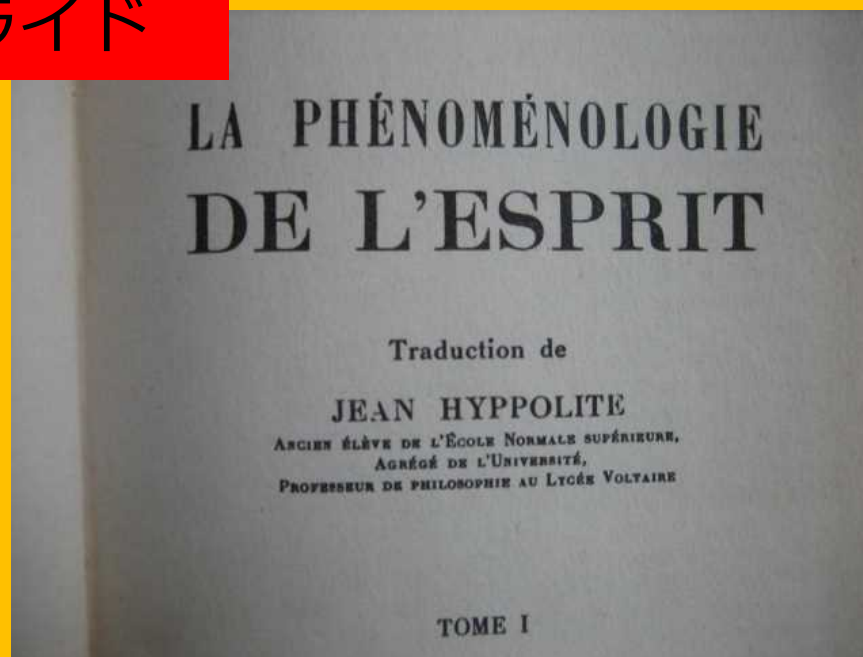
ヘーゲル 精神現象学
La Phénoménologie de
l'Esprit Hyppolite 訳

感じる蓋然
Certitude Sensible 上

仏語翻訳版から
解く絶対知の追求

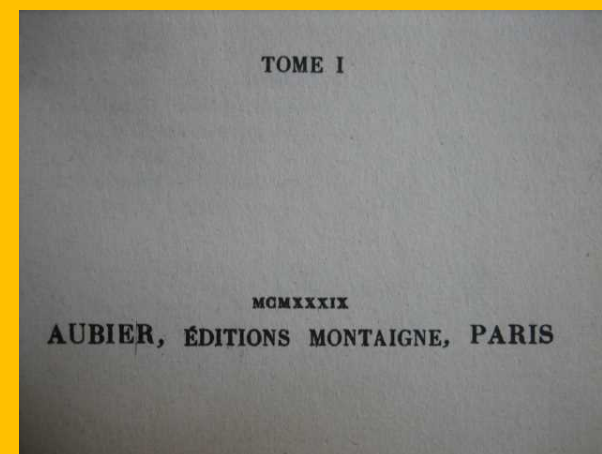
部族民通信 2025年1月

前出 参考スライド



La Phénoménologie d'Esprit精神現象学

Aubier社 Montaigne 版 赤の羊皮装丁全2巻700ページ。中央は内表紙、著者名Jean Hyppoliteの下は略歴、高等師範卒、大学教授資格、リセヴォルテール校哲学教授。
ローマ数字の出版年は1939年(右)



CONSCIENCE 悟性の章

LA CERTITUDE SENSIBLE, OU LE CECI ET MA VISÉE DU CECI

(感じる蓋然、あるいはこのモノ、このモノに向ける私の視界)

本章の第一頁

I. — LA CERTITUDE SENSIBLE, OU LE CECI ET MA VISÉE DU CECI¹

Le savoir, qui d'abord ou immédiatement est notre objet ne peut être rien d'autre que celui qui est lui-même savoir immédiat, *savoir de l'immédiat* ou de l'*étant*. Nous devons nous comporter à son égard d'une façon non moins *immédiate*, ou accueillir ce savoir comme il s'offre, sans l'altérer en rien et bien laisser cette appréhension indépendante de toute conception.

Le contenu concret de la *certitude sensible* la fait apparaître immédiatement comme la connaissance la plus riche, comme une connaissance, certes, d'une richesse à ce point infinie qu'on

CONSCIENCE 悟性の章

LA CERTITUDE SENSIBLE 感じる蓋然

悟性の判断は常に不安定（蓋然性）

LE CECI このモノ

モノの普遍性、介在が変わっていく

MA VISÉE DU CECI このモノに向ける私の視界

経験（弁証法）をモノに向けて真実を掴む

前回のヘーゲル精神現象学La Phénoménologie de l'Espritの連続投稿（2024年9月~12月）で導入章Introductionを採りあげた。

理性の目的は絶対知Savoir absoluを得ることに尽きる。ヒト思考運動は現精神象であるから、モノ実質には接触できない。理性は自身の内に現象の野を広げ、モノ実質、絶対知に迫らむとする。

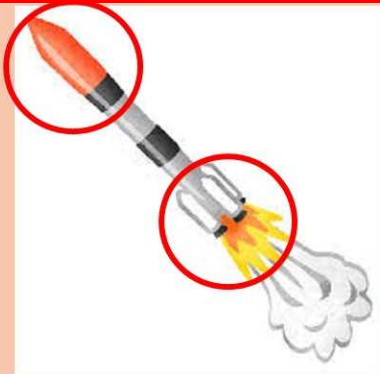
今回、本文に入り（第一章Conscience悟性）では思考の仕組み、特に悟性内部の思考の展開（前回で思考は2段ロケットとした、今回はその2段目に当たる）を解説する。

ヘーゲル精神現象学 絶対知の追求

ヘーゲル精神現象学 絶対知の追求



前出 参考スライド
一部改編



天空の真理を目指す
弁証法2段ロケット

1 段目ブースター付き
現象の野（認識）での検査
概念conceptと基準measureの
摺合せ
2 段目
知蓋然とモノ真理（弁証法）
の対決

フリーイラスト
ネットから

部族民通信

前回（導入章のまとめ）

現象活動の2段ロケット（左）

悟性は真理に近づく何かを持つ


ヘーゲル精神現象学 絶対知の追求



部族民通信2024/11/15

部族民通信2025/1/30

ヘーゲル精神現象学 絶対知の追求



天空の真理を目指す
弁証法2段ロケット

1 段目ブースター付き
現象の野（認識）での検査
概念conceptと基準measureの
摺合せ
2 段目
知蓋然とモノ真理（弁証法）
の対決

フリーイラスト
ネットから

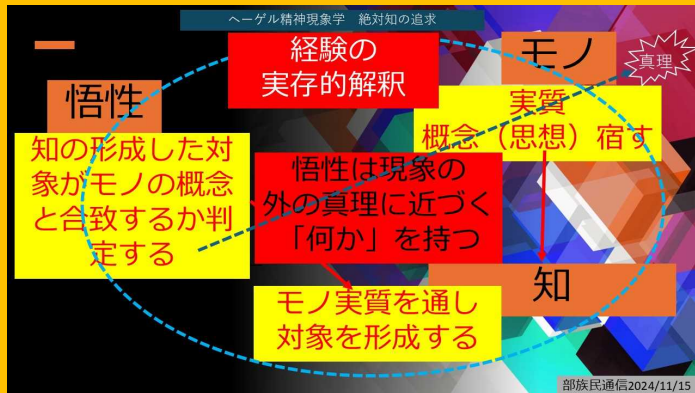
部族民通信2024/11/30

今回 感じる蓋然 （上）

現象活動の2段ロケットの精神作用

悟性は 真理に近づく何かを持つ

感じる蓋然でモノの普遍を探る



部族民（蕃神ハカミ）：本章の主題は悟性conscience、その働き方。悟性が外界モノ世界を理解する精神作用がcertitude sensible、これを「感じる蓋然」と訳した。Certitudeなる語は、主体客体の両用が可能となるという理解しにくい側面を持つ。

客体としての使用では「確実なモノ」との意味合いになろうが、本稿では「主体」として精神内に動く蓋然、として用いられる。精神が理解しようとするモノ世界とは「そうかも知れない、そうでないかも」不確実が残る。

これをして蓋然と訳した。またHyppoliteは脚注で « La certitude sensible vise … » と動詞を続けているから主体とほのめかしているので安心した。

（最初の一読では客体。モノの持つ蓋然性かと想定した、分けワカメで沈没した）

鍵語

- 1 Certitude sensible感じる蓋然
- 2 Immédiat即座 対 Médiation 介在
- 3 Négation・Affirmation・Détermination
否定肯定決定（弁証法）的思考

鍵語 1 Certitude sensible感じる蓋然 2 Immédiat即座 Médiation 介在 3 Négation・Affirmation・Détermination否定肯定決定（弁証法）

1 Certitudeの定訳は確実、必然など。これらには定量的確実性（99%？）の含意が強い。蓋然は（推定するけどそれが真実か分からない）定性的な語感を表すので、本章の趣旨により近いと思う。「あり得るかな、無いかな」の精神作用でモノを観察（感じるsensible）する。

実現する確率数値とは関係を持たない。

2 即座 Immédiat はモノを判断するとき、見えるがままをそのモノとして受け入れる作用。これがヒト判断の一般とした上で、その観察は最も貧しい真実しか見つけられないと批判する。介在はモノに（必ず）付属する属性。ヘーゲルは「今は夜」なる真実には「夜」が介在している、この介在は不定との観点から論を広げる。

3 否定肯定する過程がモノの真実。即座で観察してしまう「実体essence」ではなく、変遷（経験）dialectiqueがモノの普遍。弁証法原理を、蓋然として取り入れ真実を掴む。

本文の第一文；

« Le savoir, qui d'abord ou immédiatement est notre objet ne peut être rien d'autre que celui qui est lui-même savoir immédiat, savoir de l'immédiat ou de l'étant. Nous devons nous comporter à son égard d'une façon non moins immédiate, ou accueillir ce savoir comme il s'offre, sans l'altérer en rien et bien laisser cette appréhension indépendante de toute conception » (La phénoménologie de l'Esprit Conscience章 81頁) .

拙訳：知ること、これが第一にかつすぐさまに我々（理性）の目的であり、即座の知であり存在するモノへの知でもある。理性は少なからぬ即断をもって存在モノに当たる。あるがまま知として受け入れ、何かに置換する試みなど廃し、他のいかなる受け止めから独立して、この理解を尊重するのである（即座に知る）。

« Le contenu concret de la certitude sensible la fait apparaître immédiatement comme la connaissance la plus riche, comme une connaissance, certes, d'une richesse à ce point infinie qu'on n'en peut trouver aucune limite, ni en extension, dans l'espace et dans le temps où elle se déploie, ni en pénétration, dans le fragment extrait de cette plénitude par division. Cette connaissance apparaît, en outre, comme la plus vraie ; car elle n'a encore rien écarté de l'objet, mais l'a devant soi dans toute sa plénitude. » (同)

感じる蓋然 (la certitude sensible) の具体的内実がこの独立した理解を、豊かな認識として現出するに至る。その認識とは時間空間にいかなる限界もないうえ、細分され破碎に溶け入る展開の様など見せない。さらには最たる真実として認識に現れる。なぜならこの真実は対象から離れていない、対象を見えるがまま、横溢さで自の前においているから。

上引用文で留意すべきは2点 ;

1. 悟性がモノ世界を見る、モノは「豊かな認識」として映し出される。ここでの覚知作用は「即座immédiat」。対象を「存在そのものétant」として認識する。
2. 上記1の結論は「モノは形状を持つ、それは永遠無限、非溶解。時空と自己の形状に」制限はかからない。

これがモノ世界を見つめるヒトに共通した精神です。しかし

« En fait cependant, cette certitude se révèle expressément comme la plus abstraite et la plus pauvre vérité. De ce qu'elle sait elle exprime seulement ceci : il est ; et sa vérité contient seulement l'être de la chose. De son côté, dans cette certitude, la conscience est seulement comme pur moi, ou j'y suis seulement comme pur celui-ci, et l'objet également comme pur ceci » (82頁).

しかしこの蓋然は最も曖昧（抽象的）にして、何にもましての貧しい真実を明らかにしてしまう。モノの身の内をただ単にそんなモノ（ceci）と表しているに過ぎない。そのモノは「存在する、真実はモノとしての存在のみ」と語っているだけとなる。

こうした思考作用は「純粹な個」でしかない。あるいは個は純粹な「その者」かもしれぬ。向かい合う対象にしても純粹な「これ」でしかない（としか覚知していない）。

部族民：3の引用文で本章主題のすべてが出揃った（留意の2点=下=は否定される）。

1 「単にそんなモノ」とは時空に存在し、個（悟性）に即座に覚知されているにしか過ぎない。この即座はモノが時空の中で進行変遷する、この真理を掴めない。別の意味では「今、見えているモノ」には真理が備わらない。モノ変遷のカラクリ（弁証法）に悟性が気づいていない。

2 （行外に）モノ世界は弁証法に統治される（前回9月25日～の導入章の紹介投稿）。モノを永遠として氷結固定するモノ理解は蓋然certitudeに「貧しい真実」のみを反映させるだけである。

上引用文で留意すべきは2点 ；

1. 悟性がモノ世界を見る、モノは「豊かな認識」として映し出される。ここでの覚知作用は「即座immédiat」。対象を「存在そのものétant」として認識する。
2. 上記1の結論は「モノは形状を持つ、それは永遠無限、非溶解。時空と自己の形状に」制限はかからない。

これがモノ世界を見つめるヒトに共通した精神です。しかし

« Le Moi n'a pas la signification d'un représenter ou d'un penser des moments divers, et la chose n'a pas la signification d'une multitude de caractères distincts ; mais la chose est, et elle est seulement parce qu'elle est. Elle est ; c'est là pour le savoir sensible l'essentiel, et ce pur être ou cette simple immédiateté constitue la vérité de la chose. La certitude également, en tant que rapport, est un pur rapport immédiat. La conscience est moi, rien de plus, un pur celui-ci. Le singulier sait un pur ceci ou sait ce qui est singulier » (同)

私（大文字の私、悟性ではなくモノを見ている私）には、いろいろな時間軸、節目（moments）を思考し表現する意味合い（能力）はない。モノにしても種々性質の集成である身の内は見えない。モノはそこにただ存在するだけ。存在するからそこに在る。知にはそれは実質である。純粹な存在、あるいは純粹な即座がモノの真実を決めている（と早とちりする＝訳者）。蓋然にしても（モノ世界との）交信は純粹「即座」に制御されている。悟性とは私、純粹（単純）な「この者」である。個別性は純粹（単純）なこのモノを理解するし、それが個別であると知る。

部族民：悟性は「純粹な即座性 *cette simple immédiateté*」を持ってモノを取り込む。モノが見えるがまま、真理としてしまう、ここに誤りが宿る。Certitude蓋然が否定すべき誤謬点です。

最後の句 « *Le singulier sait un pur ceci ou sait ce qui est singulier* » 個別性は純粹なこのモノを理解…は「個別的悟性は純粹な個別のモノしか理解しない、なぜならCertitudeは即座理解をもっぱらとするから」と読みます。

Purを純粹と訳したが、日本語の「前向き語感」はフランス語のpurには必ずしも含意されない。Immédiat即座の言い換えなので「単純」が正訳であろう。

« Mais dans ce pur être qui constitue l'essence de cette certitude, et qu'elle énonce comme sa vérité, il y a encore bien autre chose en jeu, si nous regardons bien. Une certitude sensible effectivement réelle n'est pas seulement cette pure immédiateté, mais est encore un exemple de celle-ci et de ce qu'il y a en jeu » (同)

しかしこの単純存在がこの蓋然の実質となっているし、この単純が己の真理と蓋然は強弁している。正しく観察すれば、組をなす別のモノがある。感じる蓋然 (la certitude sensible) の実効的实际は、単純な即座判断のみではないと気づく。これ (単純な即座) の傍証(exemple) ながら伴うとある組の存在に気づく。

(原文引用なし) このあとこの純粹存在に脇にある組が見えている。それは「その者」の個と存在の表象 (現象) である対象。この差異 (純粹存在に対峙して「個」と「対象」の組が居座ること) を省察すると、個と対象は即座immédiatementとして蓋然に取り込まれてはいない。介在 médiationを受けている (médiatisé) と理解に至る。

(即座と介在の峻別)



ヘーゲル 精神現象学
La Phénoménologie de
l'Esprit Hyppolite 訳

感じる蓋然
Certitude Sensible 上の了

仏語翻訳版から
解く絶対知の追求

部族民通信 2025年1月